

Hokkaido University News

北大時報

令和4年

9

No. 822 September 2022

令和4年度オープンキャンパスを3年ぶりに対面形式で開催
北海道大学栄誉賞を数土文夫氏に授与
札幌キャンパスを駆け抜けるー北海道マラソン2022ー



全学ニュース

- 1 令和4年度オープンキャンパスを3年ぶりに対面形式で開催
- 3 北海道大学栄誉賞を数土文夫氏に授与
- 4 札幌キャンパスを駆け抜けるー北海道マラソン2022ー
- 5 「国民との科学・技術対話」支援事業 アカデミックファンタジスタ 今年度は22名の研究者が知の最前線を伝えます
- 6 2022年度住友化学グローバルリーダー育成奨学金授与式を開催
- 7 日本学術会議と公開シンポジウム「地球環境の未来を考える」を開催
- 8 日本アフリカ大学交流会議・学長円卓会議2022に横田理事・副学長が出席
- 9 北大フロンティア基金
- 11 北大学生×Meijiグループ CSV活動についての意見交換を実施
- 12 サステナビリティ推進機構がHBC北海道放送株式会社との連携事業を実施
- 13 「北海道大学×STV SDGsデー」を開催
- 14 サステナビリティ推進機構が江別市立江別第二中学校の生徒に研修プログラムを実施
- 15 ダイバーシティ・インクルージョン推進本部が次世代リーダーシップ研究者円卓会議Ⅱを開催

部局ニュース

- 16 プラス・ミュージアム・プログラム開始～公開シンポジウムの開催
- 17 公共政策大学院が「HOPS地方議員・公務員向けサマースクール2022 ～地域を豊かにするカーボンニュートラルの実現における市町村の役割～」を開催
- 18 北海道大学納骨堂慰霊式を挙行
- 18 薬学部が第23回生涯教育特別講座夏季講演会を開催
- 19 工学研究院新任教員向け産学連携支援説明会を開催
- 20 工学研究院が寄附分野「地域元素資源利活用工学分野」開設式・記者会見を開催
- 21 大学院水産科学研究院が「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～」「海岸動物の行動生態学実習：ヤドカリや巻貝が魅せる『奥の深い行動』を堪能しよう！」を開催
- 22 スラブ・ユーラシア研究センターがサマースクールを開催
- 23 スラブ・ユーラシア研究センターが2022年度夏期国際シンポジウム-2「ロシアにおけるメロドラマとメロドラマ的想像力：新しい視点」を開催
- 24 静内研究牧場の「北大短角牛」が新ひだか町の学校給食に採用
- 25 国際連携研究教育局先住民・文化的多様性研究グローバルステーションのジョー・ワトキンス教授が総長と懇談

研修

- 26 令和4年度北海道地区国立大学法人等中堅技術職員研修
- 27 令和4年度北海道地区国立大学法人等中堅職員研修

表敬訪問 28

人事 29

訃報

- 31 名誉教授 松永 義夫 氏
- 31 名誉教授 堤 耀廣 氏
- 32 名誉教授 小山 光一 氏
- 32 名誉教授 宮台 朝直 氏



北海道大学栄誉賞を数土文夫氏に授与



2022年度住友化学グローバルリーダー育成奨学金授与式を開催



公共政策大学院が「HOPS地方議員・公務員向けサマースクール2022～地域を豊かにするカーボンニュートラルの実現における市町村の役割～」を開催



静内研究牧場の「北大短角牛」が新ひだか町の学校給食に採用

表紙：令和4年度オープンキャンパスを3年ぶりに対面形式で開催（関連記事1頁に記載）

裏表紙：キャンパス風景⑩ 花木園（北11条西10丁目）

■全学ニュース

令和4年度オープンキャンパスを3年ぶりに対面形式で開催

8月6日（土）から8日（月）までの3日間、札幌・函館の両キャンパスにおいて、3年ぶりに対面形式でオープンキャンパスを開催しました。

今年度は、新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため、対象者を原則として小中高生に限定したうえですべて事前予約制とし、定員を例年の約半

数程度としましたが、期間中は、大勢の参加者でキャンパスが賑わいました。

7日（日）には「自由申込プログラム」を、6日（土）及び8日（月）には「高校生限定プログラム」を主に実施し、多くの高校生等が、学部等が企画した説明会、模擬講義・ゼミ、実習・

実験、見学会、保護者等も参加可能な大学概要説明の講演や個別相談会など、多彩なプログラムに参加しました。

参加者にとっては、本学の学びを味わう貴重な機会となりました。

（アドミッションセンター）



参加者で賑わう構内



本学の学生主催による
「高校生限定プログラム」の様子

令和4年度オープンキャンパス 参加者数 (注1)

学部等名	自由申込 プログラム	高校生限定 プログラム	部局等別合計
文学部	364	42	406
教育学部	135	145	280
法学部	267	66	333
経済学部	176	132	308
理学部	936	154	1,090
医学部医学科	88	91	179
医学部保健学科	184	199	383
歯学部	196	28	224
薬学部	258	278	536
工学部	519	226	745
農学部	190	145	335
獣医学部	185	41	226
水産学部	434	104	538
大学院環境科学院	152		152
附属図書館（本館・北図書館）			
国際交流課	33		33
サステイナビリティ推進機構	31	46	77
大学院教育推進機構CoSTEP（旧 高等教育推進機構CoSTEP）	15		15
各種個別相談会（注2）、講演・説明会（注3）	266		266
大学文書館	113		113
北大キャンパスビジットプロジェクト	231	28	259
総合計	4,773	1,725	6,498

（注1）学部等が実施するプログラムは、新型コロナウイルス感染症感染防止のため、対象者を原則として小中高生に限定したうえですべて事前予約制とし、定員を例年の約半数程度とした。

（注2）各種個別相談会の内訳

初年次教育・学部移行個別相談（教育推進課）、新渡戸カレッジ個別相談（新渡戸カレッジ）、学生生活個別相談〔学生寮・奨学金等〕（学生支援課）、学生相談総合センターアクセシビリティ支援室個別相談、キャリアセンター就職個別相談（キャリア支援課）、入試個別相談（アドミッションセンター）

（注3）講演・説明会の内容

「北海道大学で学ぶということ」（アドミッションセンター）、「新渡戸カレッジへのいざない目指せ！北大発グローバルリーダー」（新渡戸カレッジ）、「スカラシップアドバイザーによる日本学生支援機構奨学金説明会」（学生支援課）

北海道大学栄誉賞を數土文夫氏に授与

8月5日（金）、工学研究院フロンティア応用科学研究棟レクチャーホール（鈴木章ホール）において、JFEホールディングス株式会社名誉顧問である數土文夫氏に対する北海道大学栄誉賞授与式が執り行われました。

北海道大学栄誉賞は、本学を卒業、もしくは修了した者または本学の職員であった者のうち、学術、文化もしくは、スポーツの分野または社会活動において顕著な功績のあった者を表彰する制度であり、平成15年11月に創設さ

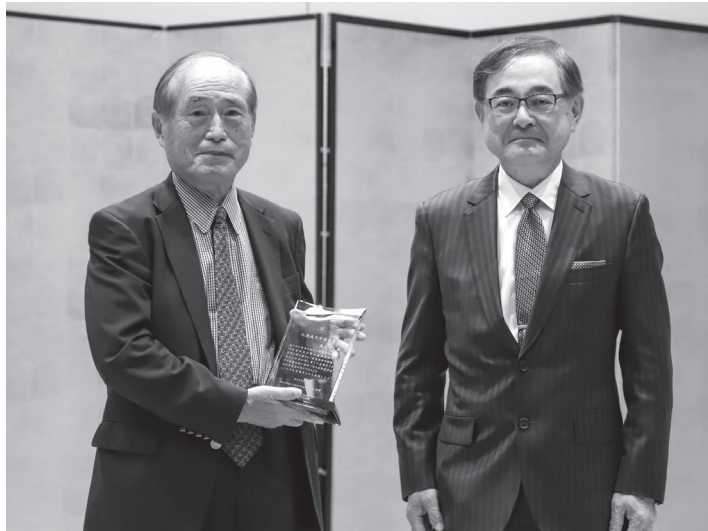
れました。受賞者は、これまで昭和31年に獣医学部を卒業したプロスキーヤーである三浦雄一郎氏1名であり、今回の授与により受賞者は2名となります。

數土氏は、昭和39年に工学部を卒業し、長年にわたり鉄鋼業をはじめ、公共放送及び電力事業等様々な業界の経営に多大なる貢献をされております。また、本学においては、経営協議会委員、連合同窓会会長及び新渡戸カレッジ副校長を務められ、本学の経営及び

教育研究の発展にもご尽力いただいております。

授与式では、寶金清博総長から數土氏に栄誉賞（楯）の授与と記念品が贈呈され、引き続き、數土氏による「伝統と継承—君子は義に喩り小人は利に喩る—」と題した講演が行われ、100名を超える出席者は熱心に聴講しました。

（総務企画部総務課）



左から數土氏、寶金総長

札幌キャンパスを駆け抜けるー北海道マラソン2022ー

8月28日（日）、北海道マラソン2022が3年ぶりに開催され、約2万人のランナーが本学札幌キャンパスを駆け抜けました。

ランナーたちはレース終盤の38km付近から本学構内に入り、緑あふれるメインストリートを通り、クラーク像

を右手に眺めつつ中央ローンの木陰を通り、南門（札幌農学校時代の正門）からゴールの大通公園を目指し、ラストスパートをかけて行きました。

2009年大会からコースに加えられた本学キャンパスには大勢の市民が駆けつけ、その温かい声援が、気力を振り

絞り力走する選手たちを後押ししました。

なお、本マラソンの様子は、UHB（北海道文化放送）とBSフジで生中継されました。

（社会共創部広報課）



総合博物館前の給水所



中央ローン横を駆け抜ける選手達



男子優勝のルカ・ムセンビ選手



女子優勝の山口 遥選手（左）

「国民との科学・技術対話」支援事業 アカデミックファンタジスタ 今年度は22名の研究者が知の最前線を伝えます

本学の研究者が「知の最前線」を出張講義や現場体験を通して高校生などに伝える事業“Academic Fantasia（アカデミックファンタジスタ）”。内閣府が推進する「国民との科学・技術対話」の一環として、北海道新聞社の協力のもと2012年から継続的に実施しています。今年度は以下の22名の研究者が参加します。

（社会共創部広報課）



8月22日（月）の北海道新聞朝刊に掲載された今年度のキックオフ広告

【順不同】

- | | |
|---|--|
| 米山 和良（水産科学研究院 准教授） | 「養殖魚の身体測定：水中で行うカメラ計測」 |
| 石垣 侑祐（理学研究院 准教授） | 「究極的共有結合への挑戦」 |
| 相沢 智康（先端生命科学研究院 教授） | 「蛋白質とあなたの健康・その深い深い関わり」 |
| 中岡 慎治（先端生命科学研究院 准教授） | 「数学で知る腸内環境」 |
| 池田 敦子（保健科学研究院 教授） | 「健康に暮らすための室内環境とは」 |
| 猪熊 泰英（工学研究院 准教授） | 「『ひも』で分子を創造する」 |
| 小崎 完（工学研究院 教授） | 「放射線・放射能の科学」 |
| 宮本 直樹（工学研究院 准教授） | 「動くがんを狙い撃つ放射線治療技術」 |
| 工藤 興亮（医学研究院 教授） | 「非侵襲的に病気を見つける最新の画像診断」 |
| 川堀 真人（医学研究院 助教） | 「脳を治す再生医療最前線」 |
| 今内 覚（獣医学研究院 教授） | 「新薬開発で動物も病気から救える時代に」 |
| 河原純一郎（文学研究院 教授） | 「高校生のための認知心理学的広告表示解説法/マスク顔コミュニケーションの認知心理学」 |
| 川本 泰之（北海道大学病院・腫瘍センター 助教） | 「がんと薬物療法、最新の治療開発」 |
| 中垣 俊之（電子科学研究所 教授） | 「原生生物のジオラマ行動力学」 |
| 三澤 弘明（電子科学研究所 特任教授） | 「夢のエネルギー人工合成の実現に向けて」 |
| 長山 雅晴（電子科学研究所附属社会創造数学研究センター 教授） | 「漸化式を使って様々な現象を数式にしてみよう」 |
| 中村 誠宏（北方生物圏フィールド科学センター 教授・苫小牧研究林長） | 「森林生態系の健康診断！」 |
| 加藤 博文（アイヌ・先住民研究センター 教授） | 「いま学ぶアイヌ民族の歴史：先住民研究で文化的多様性を考える」 |
| 山崎 圭子（環境健康科学研究教育センター） | 「環境と子どもの発達—20年間にわたる親子の長期追跡調査より—」 |
| 安成 哲平（北極域研究センター 准教授・ディスティンクイッシュトリサーチャー） | 「越境大気汚染を通じて地球環境を考える！」 |
| 繁富（栗林）香織（高等教育推進機構・新渡戸カレッジ 特任准教授） | 「折紙工学の最前線—医療への応用—」 |
| 池田 貴子（大学院教育推進機構 CoSTEP 特任講師） | 「動物問題は人間問題」 |

本学の研究を発信するウェブマガジン「リサーチタイムズ」や、アカデミックファンタジスタの公式Facebookでも、講義レポート等を随時更新しています。ぜひご覧ください。

リサーチタイムズ

<https://www.hokudai.ac.jp/researchtimes/>



アカデミックファンタジスタ公式Facebook

@Hokkaido.univ.taiwa



2022年度住友化学グローバルリーダー育成奨学金授与式を開催

8月9日（火）、ホテルマイステイズ札幌アспенにおいて、2022年度住友化学グローバルリーダー育成奨学金授与式を開催しました。

住友化学グローバルリーダー育成奨学金は、住友化学グループが「事業を通じて持続可能な社会の実現に貢献するとともに、自らの持続可能な成長を実現する」という考え方にに基づき、「次代を担う子どもたちの育成」の視点から実施されている社会貢献活動の1つとして、2020年度に住友化学株式会社から奨学援助を目的に寄附のあった奨学寄附金をもって創設されました。

住友化学グローバルリーダー育成奨学金の募集は2022年度で3回目になりますが、コロナ禍で申請者がなかった等の理由から、今年度が初めての採用となります。

授与式には住友化学株式会社から

は、辻 純平執行役員、松岡祥樹人事部担当部長、後藤友彰人事部担当部長らが、また本学からは農学研究院の坂爪浩史教授、高等教育推進機構の平田未季准教授らが出席しました。

授与式では、本学出身者でもある辻執行役員からのご挨拶の後、奨学金授与者2名に奨学金目録が授与され、次いで、奨学金の審査にあたった坂爪学生委員会学生生活専門委員長より祝辞が述べられました。続いて、奨学金授与者から留学の計画や目標、抱負などについて発表がありました。

コロナ禍のため、奨学金創設時に予定されていた懇親会の開催はありませんでしたが、授与式終了後も奨学金授与者は出席者との交流を深めていました。

（学務部学生支援課）

奨学金授与者

法学部	伴野	有里
工学院	李	介維



記念撮影



住友化学株式会社 辻執行役員のご挨拶

日本学術会議と公開シンポジウム「地球環境の未来を考える」を開催

8月16日（火）、日本学術会議第三部及び日本学術会議北海道地区会議との共同主催で、公開シンポジウム「地球環境の未来を考える～カーボンニュートラルの実現に向けて～」を学术交流会館で開催しました。

新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、対面及びオンライン配信のハイブリッド開催とし、会場参加は事前に申込みがあった高校生等に限定しました。

閉会に当たり、日本学術会議の梶田隆章会長、吉村 忍第三部長と、寶金清博総長が開会挨拶を行いました。

（梶田会長の御挨拶はオンラインで実施）。

続いて、基調講演を日本学術会議の高村ゆかり副会長が、講演を本学の地球環境科学研究所の山中康裕教授及び工学研究院の石井一英教授、東北大学大学院工学研究科の北川尚美教授、一般社団法人離島エネルギー研究所の木村誠一郎代表が行いました。

また、5グループ11名の高校生が「地球環境の未来を考える」をテーマとした発表を行い、講演者と異なる視点からの発表が注目を集めました。続いて、慶應義塾大学理工学部

都子准教授が、最近開催されたシンポジウムの報告を行いました。

総合討論では、公立はこだて未来大学の大場みち子教授がモデレータとなり、高校生とシンポジウム講演者等の間で活発な議論がなされました。

閉会に当たり、日本学術会議北海道地区会議の但野 茂代表幹事（本学名誉教授）が閉会挨拶を行いました。

本シンポジウムは、学内外271名の方に御参加いただきました。

（研究推進部研究振興企画課）



梶田会長による開会挨拶



高村副会長による講演



高校生による発表



総合討論

日本アフリカ大学交流会議・学長円卓会議2022に 横田理事・副学長が出席

8月22日（月）、横田 篤理事・副学長（国際、SDGs担当）が、日本アフリカ大学交流会議・学長円卓会議2022に出席しました。

本会議は、チュニジアで開催された第8回アフリカ開発会議（TICAD8）の公式サイドイベントとして、日本から12大学、アフリカ9か国から9大学の学長・副学長クラス及び大学関係者が参加し、オンラインで実施されました。

第一部では、主催者である科学技術振興機構（JST）の橋本和仁理事長及び、井出庸生文部科学副大臣による挨拶に続き、外務省、エジプト日本科学技術大学（E-JUST）、筑波大学、ジョモ・ケニヤッタ農工大学から講演があ

りました。

また、JSTから、さくらサイエンスプログラムによるアフリカからの年間500名の若手研究者・学生等の受入れ計画について説明がありました。

その後、全参加大学により、継続的な交流を通じた次世代の人材育成や交流の促進、さくらサイエンスプログラムを含む国際交流・協力の重要性を認識することなどが宣言されました。

第二部では、参加大学が2つのグループに分かれ、各大学代表者による大学紹介の後、日本とアフリカの交流の重要性などについて意見交換が行われました。横田理事・副学長からは、本学の概要、アフリカとの研究者や学生の交流実績、大学間交流協定校である

ザンビア大学との長い交流の歴史、現在アフリカで実施されている研究プロジェクト、また、本学アフリカルサカオフィスを中心に実施する日本留学海外拠点連携推進事業（サブサハラ・アフリカ地域）等について紹介しました。

最後に、2つのセッションから総括が報告され、JSTの甲田 彰理事の閉会挨拶により、本会議は成功裏に終了しました。

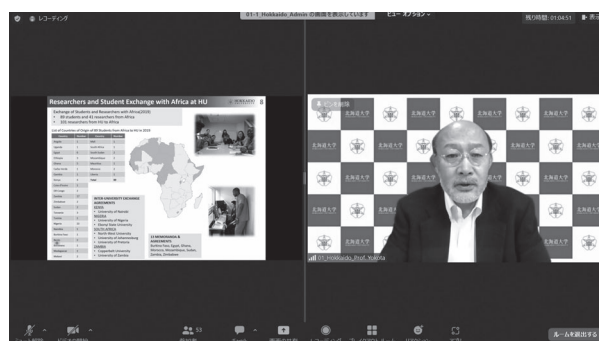
（参考）さくらサイエンスプログラムウェブサイト：

<https://ssp.jst.go.jp/program/>

（国際部国際連携課）



集合写真の様子（横田理事・副学長：写真中央）



横田理事・副学長によるプレゼンテーションの様子

北大フロンティア基金

北大フロンティア基金は、本学の創基130年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を発揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に創設しました。

奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っており、期限を付さない、息の長い募金活動することとしています。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

北大フロンティア基金情報
基金累計額（7月31日現在）

34,369件 5,958,112,239円

7月のご寄附状況

法人等17社、個人217名の方々から26,630,440円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいている方々のご芳名、銘板の掲示について掲載させていただきます。（五十音別・敬称略）

寄附者ご芳名（法人等）

医療法人社団幸和会 くとさん外科胃腸科、社会医療法人友愛会 恵愛病院、医療法人社団静和会 静和記念病院、
医療法人社団 養生館 苫小牧日翔病院、株式会社橋本川島コーポレーション、医療法人社団 豊生会、
北大リサーチ&ビジネスパーク推進協議会、株式会社ホクドール、北海道ワイン株式会社、北海道和光純薬株式会社、
医療法人社団 泰生会 堀口クリニック、メタウォーター株式会社、株式会社メディアウイズ、株式会社盛永組

寄附者ご芳名（個人）

合川 正幸	青木 俊介	秋田 聡子	阿部 雅史	天沼 裕貴	石井 哲夫	市之川一臣	伊藤 陽広
伊藤 利章	伊藤 寿朗	猪股 路子	井原 博	入澤 秀次	氏平 増之	梅本 由佳	縁記 和也
遠藤 公憲	遠藤 由香	遠藤 陽三	大坂 嘉彦	大澤 國雄	大城 純市	太田 慎吾	大友 広彰
大場 淳一	大原 正範	大森 浩二	岡崎 義勝	小笠原延行	岡野 宇広	奥田 英信	奥村 和子
奥村 和久	小田原一史	小原 大和	葛西 勤	金川 眞行	金子 隆	川島のぞみ	河本 充司
菊地 英毅	衣川 暢子	木村 太一	木村 祐介	京極 典憲	日下 大器	久保 良彦	鯉沼 潤吉
上月 浩	小瀬村貴敏	小瀧 安史	小長井奎幸	小林 賢人	齊藤 晋	齊藤 久	酒井 圭輔
坂岡 智美	榊原 純	坂本 大介	桜田 厚子	佐々木真知子	佐藤 清香	佐藤 淳治	佐藤 仁一
佐藤ひとみ	三升畑元基	重田 親司	志済 聡子	渋谷 正人	下沢 英二	白波瀬景子	菅原 新也
杉江 和男	杉野 弘和	鈴木 善法	鈴木 一司	鈴木 貴之	諏訪 文洋	関 達也	瀬名波栄潤
高木 侑子	高橋 礼典	武川祐一郎	立邊 宏美	田中 竹延	田中 紀子	田中 眞紀	谷 幸政
谷 佳津子	玉置アツコ	玉澤 友基	土家 琢磨	筒井 直子	寺澤 睦	戸嶋 一樹	豊田 威信
中井 光野	中島 公博	中嶋 智	中村 雅夫	中谷 風太	西谷 昌弘	西田 実弘	西本美枝子
野村 亮斗	長谷川秀助	長谷川秀樹	花田 秀一	羽成 達幸	林寺 正俊	原田 一道	樋田 京子
福士 幸治	福田 クミ	福永 悟郎	藤澤 裕子	船津 保浩	古家 乾	星野 謙蔵	本間 仗价
前田 博	前田 裕貴	牧田 道夫	松原 謙一	松本 隆児	宮澤 達也	宮田 信幸	村上 久代
村瀬徳啓充	本岡 竜	森田 高行	森永 大亮	矢嶋 剛	山内 歩	山口理喜三	山田 澤明
山本 茂生	横田 浩	横山 考	吉田 広志	吉田 裕孝	吉見 宏	分島 亮	和氣 光則
渡辺明日香	渡部悠里子						

銘板の掲示 20万円以上のご寄附で新規に銘板を掲示される方

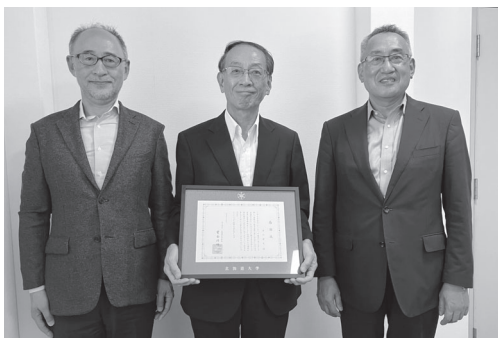
(個人)

大原 正範、菊地 英毅、小瀬村貴敏、小長井奎幸、榊原 純、桜田 厚子、佐藤ひとみ、重田 親司、林寺 正俊、
原田 一道、矢嶋 剛、山本 茂生

(法人)

医療法人社団幸和会 くとさん外科胃腸科、医療法人社団静和会 静和記念病院、北海道ワイン株式会社

〈感謝状の贈呈〉



湯川 康史 様 (令和4年8月9日)



北海道ガス株式会社 様 (令和4年8月18日)



原田 一道 様 (令和4年8月19日)



眞柄 泰基 様 (令和4年8月22日)

ご寄附のお申し込み方法

北大フロンティア基金ホームページの「教職員の方によるご寄附について」にアクセスしてください。
<https://www.hokudai.ac.jp/fund/howto-staff.html>

①給与からの引き落とし

ホームページから「北大フロンティア基金申込書 (兼・給与口座からの引落依頼書)」をダウンロードし、ご記入の上、卒業生・基金室基金事務担当に提出してください。

②郵便局または銀行への振り込み

卒業生・基金室基金事務担当にご連絡ください。払込取扱票をお送りします。

③現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、卒業生・基金室基金事務担当にご持参ください。

申込書は、ホームページから「北大フロンティア基金申込書 (教職員現金用)」をダウンロードしてご記入いただくか、卒業生・基金室基金事務担当にもご用意していますので、お越しいただいてからご記入いただくことも可能です。

④クレジットカード決済・コンビニ決済でのご寄附

北大フロンティア基金ホームページ

(<https://www.hokudai.ac.jp/cgi-bin/fund/bin/xRegist.cgi>) の寄附申し込みフォームから申込をお願いします。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ 卒業生・基金室基金事務担当 (事務局・学内電話 2017)

(社会共創部広報課)

北大学生×Meijiグループ CSV活動についての意見交換を実施

8月1日（月）、産学・地域協働推進機構の椎名希美特任講師が実施する大学院共通科目「ビジネス基礎Ⅱ」において、Meiji Seikaファルマ株式会社経営企画部の小澤由貴様にご講演いただき、CSV活動についての意見交換を実施いたしました。

CSV（Creating Shared Value）は「（社会価値と経済的価値の両立による）共通価値の創造」を指し、従来の

法令を遵守し、人権に配慮し、社会に批判されないように倫理的活動を行うにとどまる義務的CSRとは異なり、社会課題の解決に積極的に取り組む戦略的CSRとして捉えられています。

Meijiグループのサステナビリティビジョンに基づく実践的な取組事例をご共有いただき、当日は参加学生8名がチームに分かれ、公共への配慮と企業利益の両立、新しい価値を創造する

積極的取組やソーシャルイノベーションの観点などから、質疑応答やディスカッションを行いました。参加学生が最新のCSV活動を知る機会の創出とともに、学生ならではの目線から考えるCSVについても考えが深まりました。

（産学・地域協働推進機構）



ご講演中の様子



ディスカッション中の様子

サステナビリティ推進機構がHBC北海道放送株式会社との連携事業を実施

HBC赤レンガプレミアムフェスト

7月8日（金）から10日（日）に札幌市北3条広場（アカプラ）で行われた「HBC赤レンガプレミアムフェスト」（主催：北海道放送株式会社（以下「HBC」））にブース出展とステージプログラムへの出演を行いました。

ブースでは、本学の「持続可能な開発」に資する取り組みについてパネル展示を行ったほか、本学静内研究牧場にて飼育している「北大短角牛」の販売を行いました。

また、7月10日（日）には同広場に

設置されたステージにおいて、「【北海道ワイントーク】今、北海道ワインが熱い！北海道が元気になるワインを学ぶ！」と題してトークショーが行われ、農学研究所所属北海道ワインヌーヴェルヴァーグ研究室メンバーの曾根輝雄教授が、HBCアナウンサー3名とともに出演しました。

トークショーでは「なぜ今、北海道でワインなのか？」という理由を紐解きながら、北海道のワインを今後もサステナブルなものにしていく手がか

りについてトークを行いました。

「HBC赤レンガプレミアムフェスト」には3日間の開催期間を通じて約6万人が訪れました。



「HBC赤レンガプレミアムフェスト」のブース

北海道to the futureプロジェクトに協力

8月9日（火）、10日（水）には、HBCが北海道銀行と連携して行っている「北海道to the futureプロジェクト」が主催し、サステナビリティ推進機構SDGs事業推進本部が共催して「『子どもSDGs大学』いのちのつながり～食べ物からうんちまで～」が北大学術交流会館で開催されました。

本イベントは、小学5、6年生を対象に8月9日（火）、10日（水）の両日、同じ内容で行われ、延べ30名以上の小学生とその家族が参加しました。

「子どもSDGs大学」は、HBCの森結有花アナウンサーの司会により進行し、まず、出村 誠総長補佐（先端生命科学研究院教授）とHBC清水 収総合ビジネス局長から開会挨拶がありました。

続いて行われた第1講義は、「うんち学への招待」と題し、理学研究院の

増田隆一教授と森アナウンサーの対話形式で進められ、動物の頭骨の標本なども使って、食べ物からうんちとなり、それぞれに生き物と地球をつなぐ大事な役割があることなど、動物や植物等のすべての生き物の「いのちのつながり」をテーマにした説明がありました。また、標本を子どもたちに実際に触ってもらった時間も設けられ、「なぜモルモットのうんちは雄雌で大きさが違うの？」「コアラの赤ちゃんがうんちを食べるってホント？」など、子どもたちから質問が出されると増田教授は丁寧に答えていました。

次に「Aグループ：養蚕」と、「Bグループ：牛の家畜」に分かれて「教えて大学生！見て・さわって・体感」と題して第2講義が行われました。

「Aグループ：養蚕」では、農学研究院応用分子昆虫学研究室の佐藤昌直

准教授と農学部応用生命学科の学生有志が、子どもたちに実際の蚕に触れて、顕微鏡でも観察するなどの体感をしてもらい普段見ることができない蚕について学びました。

また、「Bグループ：牛の家畜」では、農学部畜産科学科の学生有志が自作のポスターなどにより、牛の消化の特徴、畜産の恩恵と環境への影響について説明を行いました。説明では、実際の飼料を子どもたちに触ってもらったり、クイズを出したりして、子どもたちに考えてもらいながら進め、参加した子どもたちは講義を楽しみました。

講義終了後には、「子どもSDGs大学」の修了式が行われ、出村教授から参加した小学生全員に修了証が手渡されました。

（サステナビリティ推進機構）



「子どもSDGs大学」で開会挨拶を行う出村総長補佐



第1講義を行う増田教授



Bグループ：牛の家畜

「北海道大学×STV SDGsデー」を開催

サステナビリティ推進機構と札幌テレビ放送株式会社（以下「STV」）が本年7月1日に締結した連携協定による最初の事業として、7月29日（金）、「北海道大学×STV SDGs デー」を開催しました。

メイン会場となったクラーク会館では、最初にサステナビリティ推進機構SDGs事業推進本部長の横田 篤理事・副学長が開会挨拶を行いました。続いて、水産科学研究院の向井 徹教授から、「海の豊かさを守る」と題した基調講演が行われ、市民にも身近な話題を織り交ぜながら、水産科学研究院が「海の豊かさを守る」ために研究・教育活動を進めていることが説明されました。

その後、STVの大家綾香アナウンサーと藤井孝太郎アナウンサーによる「なかよく使う たいせつに使う」と題した絵本朗読が行われました。絵本の「てぶくろ（ウクライナ民話）」「ひまなこなべ（アイヌ民話）」「ルリユールおじさん（創作絵本）」の朗読が行われ、共生していくことの大切さや、ものを大事にすることの大切さを伝えました。

午後からは、地球環境科学研究院の山中康裕教授と任意団体snugの長谷川友子氏による進行で、藻岩高校、旭川西高校、幌加内高校、札幌聖心女子学院高校、置戸高校、札幌北高校、当別高校、Whose×foods（静内）、Fridays For Future（帯広）からの高校生22名が「欲しい！ 共に作る未来」と題して発表を行いました。高校・チーム別に「よりよい未来のために普段自分たちが考えていること」について発表し、発表の後はディスカッションを通して意見をまとめました。

続いて、STVの松野 史コンテンツビジネス部部長より、「北京冬季五輪とパートナーシップ」と題した講演が行われ、北京2022冬季オリンピック競技大会の際に、報道としてどのように関わってきたのかについて講演がありました。

最後に、STVの坪内弘樹常務取締役（SDGs担当）による閉会挨拶が行われ、STVと本学が協力してSDGsの達成に貢献していくことが述べられました。

このほかにも、クラーク会館では協賛企業による展示、水産科学研究院による展示、北海道による展示、北大生協によるイベント限定の「北大短角牛ステーキ定食」の提供、学生サークルによるパイプオルガンの演奏などが行われ、クラーク会館全体のイベントを通じて約600人の来場者がありました。

メイン会場となったクラーク会館と並行して、総合博物館の小林快次教授による「わくわく恐竜研究室ツアー」が計4回行われ、夏休み中の小学生延べ30名以上とその家族のみなさんが参加しました。ツアーでは、展示している恐竜の化石等を使って説明が行われ、小林教授からのクイズやツアーに参加した小学生から質問が出されるなど、活発な意見交換も行われました。

サステナビリティ推進機構とSTVは、今後もSDGs達成へ取り組み、世界の課題解決に貢献し、地域活性化や学生、市民らの成長と発展につなげられるような事業を実施していきます。

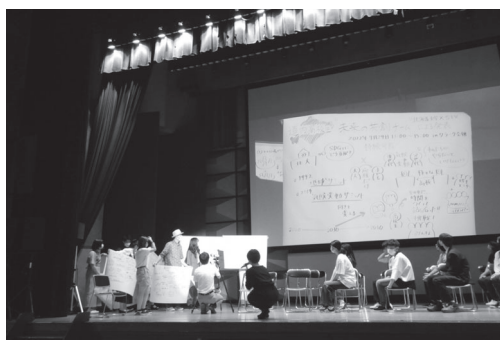
（サステナビリティ推進機構）



開会挨拶を行う横田理事・副学長



基調講演を行う向井教授



高校生による発表「欲しい！ 共に作る未来」



小林教授による「わくわく恐竜研究室ツアー」

サステナビリティ推進機構が 江別市立江別第二中学校の生徒に研修プログラムを実施

8月18日（木）、サステナビリティ推進機構SDGs事業推進本部は、江別市立江別第二中学校2年生の生徒12名に対して研修を行いました。

江別第二中学校では、宿泊学習で、生徒たちが複数のグループに分かれ、関心のあるもの、場所等を選択して訪問する「自主研修」を実施しています。SDGs事業推進本部はこの自主研修の中の1つとして「北海道大学のSDGs」のプログラムを実施しました。

同校の生徒12名は、最初に学術交流会館でSDGs事業推進本部加藤 悟教授による講義を受けました。講義では、本学の歴史と基本理念の説明があった後、世界の課題解決としてのSDGsに貢献することを目標としていること、SDGsを自分事として考えることの大切さなどについて説明がありました。

講義の後は、総合博物館に移動し見学を行いました。見学の前に、加藤教

授からSDGsの世界観である「すべての人が、自分らしく、世代を超えて、よく生きる」に関連するものを展示物の中から見つけ、見学終了後に発表する課題を課しました。

約1時間の見学終了後、生徒全員から見学した展示物のSDGsとの関連について発表し、加藤教授がそれぞれの発表にコメントを行いました。

（サステナビリティ推進機構）



講義を行う加藤教授



展示物についての発表の様子

ダイバーシティ・インクルージョン推進本部が 次世代リーダーシップ研究者円卓会議Ⅱを開催

7月29日（金）、京都大学の世界視力を備えた次世代トップ研究者育成プログラム（L-INSIGHT）との共催で「次世代リーダーシップ研究者円卓会議Ⅱ～無意識のバイアスを生み出す構造をひもとき、誰もが活躍できる研究環境のあり方を考える～」を開催しました。このイベントは、若手研究者が「無意識のバイアスが生じる構造」について理解した上で、現状の課題やその解決策について話し合うことを目的として開催しました。

創成研究機構研究人材育成推進室（L-Station）の共催、キリンホールディングス株式会社、三井化学株式会社、株式会社島津製作所、北海道ダイバーシティ研究環境推進ネットワーク（KNIT）の協力、在札幌米国総領事館の後援のもと、オンラインで中継を行い、140名近い参加者がありました。

Invited Talkでは、上智大学の出口真紀子教授に「マジョリティの特権を可視化する」というタイトルで講演いただきました。講演では「労無くして得られる優位性」の特権と定義した上で、それを持つマジョリティは自らの特権に気づきにくく、さらにその特権

は差別と表裏一体であるため、偏見や差別をなくすためにはマジョリティの特権を可視化する必要があることが話されました。また、特権に気づいたマジョリティがアライとして活動することの重要性も語られました。

続いてのRound Tableでは、16名の若手研究者と京都大学・本学の大学院生・学部生が、4チームに分かれて議論を行い、うち1チームの様子がオンライン配信されました。各チームの議論ではまず、無意識のバイアスやマジョリティの特権の身近な例やそれによって能力発揮が妨げられる人や状況について意見を出し合いました。議論の後半では、あらゆる人が能力を発揮できる環境が達成された場合の利点について活発な意見が出されました。

Closing Remarksでは、各チームのファシリテーター役の研究者がチームを代表して議論のまとめを発表しました。

イベント終了後、各チームからの発表をもとに、京都大学・磯部昌憲フェローがステートメントを以下の通りまとめました。

「無意識バイアスを生む『特権構造』

の解消は、関わる研究者すべての主体的で自由な選択につながることや、誰しもが持ちうるマイノリティ性の自己救済となることによって、研究者個人や研究環境に幅広く資するものである。その達成には特権構造の可視化と共有が重要であり、学習や疑似体験がその一助となる。」

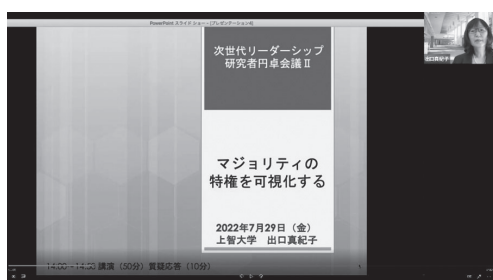
このステートメントを全員が心にとめ、普段の仕事や教育研究活動の中で各自が自分にできることを一歩ずつ進めることを期待しています。

ダイバーシティ・インクルージョン推進本部では、本学の研究環境の一層の充実に向けてさらなる取組を進めてまいりますので、引き続きのご理解とご協力を賜りますと幸いです。

ダイバーシティ・インクルージョン推進本部の活動について興味のある方は、こちらのホームページをご覧ください。

<https://www.dei.hokudai.ac.jp/>

（ダイバーシティ・インクルージョン推進本部）



Invited Talk 出口真紀子氏



円卓会議の様子



参加者集合写真

■ 部局ニュース

プラス・ミュージアム・プログラム開始～公開シンポジウムの開催

文化庁からの文化芸術振興費補助金を受け、「令和4年度 大学における文化芸術推進事業」の一つとして、「ミュージアムにおける異分野との「対話」と「寄り添い」を通じた人材育成事業」（略称：プラス・ミュージアム・プログラム）が7月30日（土）より本学で始まりました。

本事業は、2018年度から2020年度に実施した「学芸員リカレント教育プログラム」（文化庁助成事業）の成果を踏まえ、今年度から3年間にわたって実施していく、社会人の学び直しのためのリカレント教育プログラムです。

近年、ミュージアムに求められる役割はますます多様になってきています。ミュージアム従来の機能に加え、さらに観光、まちづくり、福祉などの課題にミュージアムが積極的に貢献していく必要があります。そこで、本事業では、ミュージアムで活躍する現役学芸員、図書館、劇場といった各種文化施設のスタッフ、地方自治体、企業で地域の課題に取り組む方々を対象に、ミュージアムの可能性をともに考えていくことが目的となっています。

7月30日（土）、新しいミュージアム像を考える切り口として、開講記念の公開シンポジウム「ミュージアム発の幸福論」を開催しました。はじめに、寶金清博総長よりビデオメッセージにて開会の挨拶をいただき、その後、4名のパネリストからご報告がありました。

あべのハルカス美術館上席学芸員の浅川真紀氏からは、自身が学芸員として、人々と作品の出会いをサポートしてきた経験をもとに「幸せをもたらす幸せなミュージアム像」について語っていただきました。

九州産業大学地域共創学部の緒方泉教授からは、博物館でのリラックス効果（博物館浴）について、国内外の最新事例を紹介し、生理・心理測定による研究手法の統一化に向けた現状と課題を発表いただきました。

本学工学研究院の小篠隆生准教授からは、人々に幸せを感じさせる場づくりの事例として、北海道東川町における小学校と地域交流センターの移転改築から旧小学校の校舎・用地を再生した「せんとびゅあ」の一連の取組みを紹介いただきました。

最後に本学文学研究院の佐々木亨教授からは「ミュージアムで得る「価値」とは？：『対話』のチカラ」と題して、いくつかの事例を通して来館者がミュージアムで得る「価値」は実に多様であるとした上で、さらにミュージアム自体が、実は「対話」的な存在ではないかという本事業における立ち位置について提起いただきました。

後半のパネル・ディスカッションでは、本事業の代表である本学文学研究院の今村信隆准教授の司会進行で、長期間で次世代への働きかけがもたらす幸福やミュージアムの価値測定の限界と可能性について議論を繰り広げ、オンラインと会場から質問も受けました。

最後に本学文学研究院の藤田 健研究院長が閉会のご挨拶に立ち、今後のプログラムに対する期待を表明されました。

今回のシンポジウムには、オンラインでの参加者を含めて全国各地から120人以上が集まり、本プログラムのよい出発点となりました。

（文学研究院）



寶金総長の挨拶



浅川氏の講演



パネル・ディスカッションの様子



藤田研究院長の閉会挨拶

公共政策大学院が「HOPS地方議員・公務員向けサマースクール2022 ～地域を豊かにするカーボンニュートラルの実現における市町村の役割～」を開催

公共政策大学院（公共政策学教育部・公共政策学連携研究部、略称HOPS）は、8月24日（水）・25日（木）に「地方議員・公務員向けサマースクール」を開催しました。

本講座は平成20年度から、地方議会の活性化と議員の自己啓発・自己研鑽に資することを目的に「地方議員向けサマースクール」としてスタートし、平成28年度より地方公務員にも門戸を広げて開講してきたものです。昨年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響により全面オンラインでの開催となりましたが、今年度はグループワークを含む2日コースには対面式を復活させ、道内外から地方議員36名、地方公務員23名の参加を得ました。

1日目は「自然豊かな北海道でカーボンニュートラルを目指す上での市町村の役割」について環境省北海道地方環境事務所統括環境保全企画官 小高

大輔氏、「地域に裨益する再生可能エネルギーと地域循環共生圏」について秋田県にかほ市総合政策課 高橋 潔氏、「脱炭素化と持続的発展を両立するニセコモデルの実現」について北海道ニセコ町企画環境課環境モデル都市推進係係長 島崎貴義氏より講演をいただきました。

2日目は、公共政策大学院教授 中尾文子の講演「地理情報の活用とバードストライク対策」、名古屋大学教授 丸山康司氏による講演「地域の将来ビジョンとゾーニングマップづくり」につづき、HOPS専任教員がファシリテーターとなってグループワーク「ゾーニングマップ協議の試行」及び「再生可能エネルギーによる地域への裨益についてのディスカッション」を行いました。

ゾーニングマップ協議は受講者の自治体を取り上げ、地理情報システムを活用して作成した再生可能エネルギー

導入ポテンシャルマップ、土地利用図並びに鳥類センシティブティマップ及び当該自治体の排出量カルテを用いて、ロールプレイングで行いました。また、地域への裨益については、再生可能エネルギー導入を交通網や防災力の強化など地域課題の解決に繋げるための意見交換を行いました。

受講者からは時機を得たテーマであり、講演、グループワークとも充実した内容であったとの声が聞かれました。

公共政策大学院では、今後も受講者の方々が最新の知見に触れつつ、互いに親密なネットワークを形成する契機となるよう改善を重ねながら本講座の実施を継続し、地域の活性化・振興に取り組んでいく所存です。

（公共政策学教育部・公共政策学連携研究部）



1日目講演の様様



2日目グループワークの様様



オンライン受講の参加者



2日コース受講者集合写真

北海道大学納骨堂慰霊式を挙行

医学研究院・医学院・医学部、歯学研究院・歯学院・歯学部、保健科学研究院・保健科学院・医学部保健学科、北海道大学病院では、8月3日（水）に北海道大学納骨堂（札幌市豊平区平岸）において、医学及び歯学の教育・研究のため尊い御遺体をささげられた

御霊の御冥福をお祈りする慰霊式を執り行いました。

慰霊式には、寶金清博総長、畠山鎮次医学研究院長・医学院長・医学部長、網塚憲生歯学研究院長・歯学院長・歯学部長、伊達広行保健科学研究院長・保健科学院長・医学部保健学科

長、渥美達也北海道大学病院長ら21名が参列し、参列者全員による黙祷及び献花を行い、厳粛のうちに慰霊式が終了しました。

（医学研究院・医学院・医学部）



参列者による黙祷



献花をする寶金総長



献花をする畠山医学部長

薬学部が第23回生涯教育特別講座夏季講演会を開催

薬学部生涯教育特別講座は、北大薬学部同窓生を含む医療関係及び関連領域の仕事に従事される方を対象に、医療における諸問題について最新の情報を提供することを目的として実施されています。

コロナ禍で開催を見合わせていた本講座でしたが、8月3日（水）、3年ぶりに薬学部臨床薬学講義室においてオンラインとのハイブリッドで夏季講演会が開催され、薬局や病院などの薬剤師

の方々をはじめ、薬学部学生や教員等163名が参加しました。

今回は薬学研究院 分子細胞医薬学研究室 教授の大西俊介先生に「がん治療における漢方薬の役割—なぜ効くのか？本当に効くのか？」のタイトルでご講演いただきました。講演では、がん治療の副作用改善における漢方薬の効果などについて、臨床研究での実際の結果や考察を交えつつ大変わかりやすく解説してくださいました。

会場から、またオンラインからもたくさんの質問が寄せられ、活発な議論が行われました。「大変勉強になり、今後の服薬指導に活かしていきたいです」「臨床の結果を元に説明されていたので理解しやすかったです」「漢方薬の可能性を改めて認識しました」など多くの意見が寄せられました。

（薬学研究院・薬学部）



講師の大西俊介先生



会場の様子

工学研究院新任教員向け産学連携支援説明会を開催

8月4日（木）、工学研究院において産学・地域協働推進機構のサポートのもと、工学研究院新任教員向け産学連携支援説明会を開催しました。

工学研究院においては、教員の優れた研究シーズを社会実装し、社会課題の解決と豊かな社会の構築に貢献することを組織的にサポートする目的で、産学連携アドバイザーチームを組織しています。産学連携アドバイザーチームでは、民間企業との共同研究の研究費の適切化やサプライチェーンの構築支援に加えて、部局間連携も含めた異分野連携の共同研究体制の構築支援や共同研究に参画する学生向けの守秘義務講習会の実施などの活動を行っています。このような活動や本学のスタートアップを含む様々な産学連携に

関する支援内容を、新任教員を含む教員に広く知っていただくために説明会を開催しました。

当日は、まず、工学研究院の箆橋雄二客員教授より産学連携アドバイザーチームの体制や活動内容について説明があり、チームリーダーの幅崎浩樹副研究院長より工学研究院の共同研究実績について説明がありました。その後、産学・地域協働推進機構産学連携推進本部の寺内伊久郎本部長より、共同研究契約や特許出願、スタートアップ支援に関する説明があり、最後の質疑応答においては多数の質問が出るなど、参加者にとっては非常に関心が高い説明会となりました。

今回の説明会には、対面及びオンラインにより23名の教職員が参加し、併

せて、当日出席ができなかった教職員は、eラーニング用コンテンツとして後日視聴することができるようになっています。

工学研究院では、「ロバスト農林水産工学国際連携研究教育拠点」、航空・宇宙・船舶工学のフロンティア分野での次世代人材育成と社会実装を目指す「f3工学教育研究センター」などを代表例として、他部局や他大学と連携した教育研究活動に力を入れております。このような活動をさらに社会実装に繋げられるように産学連携アドバイザーチームにおいて支援していきます。

（工学研究院）



箆橋客員教授



幅崎副研究院長



寺内産学連携推進本部長

工学研究院が寄附分野「地域元素資源利活用工学分野」 開設式・記者会見を開催

8月18日（木）、工学研究院において、寄附分野「地域元素資源利活用工学分野」の開設式・記者会見を開催しました。

この寄附分野は、地域の元素資源を最大限利活用した脱炭素社会・循環型社会の実現を目指して、古河電気工業株式会社の寄附により、4月1日付で工学研究院応用化学部門に設置されたものです。

本分野では、北海道で大量に発生する家畜ふん尿に多く含まれる炭素や窒素から新しいエネルギーを開発するな

ど、地域の未利用元素資源を活用するための実用化（社会実装）に向けた共創研究を進めるとともに、地域社会のニーズに貢献できる人材の育成にも取り組みます。

開設式では、増田隆夫理事・副学長から「北海道大学発のバイオコミュニティ構想」の紹介がありました。続いて、中坂佑太准教授から本分野の概要説明が行われ、引き続き、實金清博総長から挨拶があり、その後、古河電気工業株式会社的小林敬一 代表取締役社長、栢谷義雄 取締役 兼 執行役員常

務 営業統括本部長、藤崎 晃 執行役員 研究開発本部長からの挨拶がありました。最後に、瀬戸口剛工学研究院長から謝辞が述べられた後、實金総長から小林代表取締役社長へ感謝状が贈呈されました。

開設式後には、報道機関9社が参加しての記者会見が行われ、本分野の研究に対する注目度の高さをうかがい知ることができました。

（工学研究院）



（左から）瀬戸口研究院長、中坂准教授、増田理事・副学長、實金総長、古河電気工業株式会社 小林代表取締役社長、栢谷取締役、藤崎執行役員



開講式で説明する増田理事・副学長（左）と中坂准教授（右）

大学院水産科学研究所が「ひらめき☆ときめきサイエンス ～ようこそ大学の研究室へ～」

「海岸動物の行動生態学実習：ヤドカリや巻貝が魅せる 『奥の深い行動』を堪能しよう！」を開催

7月30日（土）、函館キャンパスにおいて「海岸動物の行動生態学実習：ヤドカリや巻貝が魅せる『奥の深い行動』を堪能しよう！」を開催しました。本プログラムは、高校生を対象にあまり教わる機会のない「行動生態学」を紹介し、海岸動物の行動・生態研究に対する関心を高め、さらに、海岸動物が意外と他個体を気にしながら暮らしていることを観察と実験で科学的に実証できることを実感してもらうプログラムです。令和4年度科学研究費助成事業（科学研究費補助金）（研究成果公開促進費）の交付を受けて実施しました。

「LASBOS」を用いて、本プログラムの基礎知識を伝えるオンライン教材や海岸動物の魅力を伝える動画を公開

して参加者を募集した結果、当日は道内外から訪れた11名の高校生が参加しました。開講式で本プログラムの趣旨と科研費に関して説明した後、借上げバスで、函館湾西端の葛登支岬周辺海岸へ移動しました。そこでは野外実習として海岸動物の観察・採集を行いました。野外実習後は函館キャンパスに戻り、行動生態学の研究に関する講義や、海岸動物を用いた実験実習を行いました。

参加者は、大変熱心に取り組んでおり、海岸動物を対象とした行動・生態研究の魅力や、大学での研究生生活を知る良い機会になりました。また、「身近な動物を丁寧に観察したり簡単な実験をするだけでも、おもしろい現象を発見したり、そこから生まれた疑問を

自分なりに追求できると学べました。より身近に『研究』を感じられました。」等、満足度の高い感想が寄せられ、今回スタッフとして本プログラムに参加した大学生や大学院生にとってもアウトリーチ活動を実体験する貴重な場となりました。

※LASBOSは、Learning and Study by Balance de Ocean System の頭文字で、海と生き物のオンライン教材群です。「海のトップサイエンティストの早期発掘と育成」を目指した教育プログラム（北海道大学機能強化促進事業2019-2023）であるバランスドオーシャン事業が提供しています。

（水産科学研究所）



大学院生スタッフによる講義の風景

スラブ・ユーラシア研究センターがサマースクールを開催

スラブ・ユーラシア研究センターは、8月25日（木）から26日（金）に、JCREES（日本ロシア・東欧研究連絡協議会）との共催で「スラブ・ユーラシア研究サマースクール」を開催しました。スラブ・ユーラシア地域の研究を志す学生を増やし、学生が学際的な研究を行えるよう支援・奨励することを目的としています。財源としては、JCREESの資金に加えて、百瀬 宏氏（津田塾大学・広島市立大学名誉教授、1969年～1971年スラブ・ユーラシア研究センターの前身である法学部附属スラブ研究施設長）から本センターへの寄附を利用して行われました。百瀬氏からのご寄附は2020年に寄せられたもので、本センターでは「百瀬基金」を設立し、若手研究者を支援する百瀬フェローシップなどに活用しています。なお、JCREESは、ロシア・東欧学会、日本ロシア文学会、ロシア史

研究会、比較経済体制学会、日本スラヴ学研究会の5学会で構成される組織で、本センターが事務局を務めています。

本サマースクールの参加学生は、全国の大学から公募で選ばれた22名で、内訳は学部3～4年生が9名、修士課程院生が5名、博士課程院生が8名でした。本サマースクールは、対面とオンラインのハイブリッドで実施されましたが、対面の参加者が20名、オンラインの参加者が2名となりました。

サマースクールでは、JCREESを構成する5学会から各1名の講師が派遣され、これに本センターの共同研究員1名を加えた計6名の講師がスラブ・ユーラシア地域に関わる文学、文化、歴史学、政治学、国際関係論、経済学の観点から講義を行いました。また、学生同士の交流や講師・教員との交流を目的に、オンライン参加者を含む学生

1人1人が研究発表を行いました。講義や発表では、学生から多くの質問があり、活発な意見交換が行われました。一部の院生は、滞在を延長してスラブ・ユーラシア地域研究の蔵書が充実している附属図書館と本センター図書室で資料収集を行いました。

参加学生は自分の専門以外の講義を受けたり、自分の研究分野に近い講師・教員からコメントを得たりして、涼しい札幌で有意義な時間を過ごしたように見受けられました。また、同世代の学生との交流からも大きな刺激を受けたようでした。

このようなサマースクールは昨年について2回目となりました。来年以降の継続も検討していく予定です。

（スラブ・ユーラシア研究センター）



安達大輔准教授による講義



学生による発表



参加者の集合写真

スラブ・ユーラシア研究センターが2022年度夏期国際シンポジウム-2 「ロシアにおけるメロドラマとメロドラマ的想像力：新しい視点」を開催

スラブ・ユーラシア研究センターは、「ロシアにおけるメロドラマとメロドラマ的想像力：新しい視点Melodrama and Melodramatic Imagination in Russia: New Perspectives」を今年度の夏の国際シンポジウム・パート2と位置づけ、8月1日（月）・2日（火）に開催しました。

このシンポジウムは、安達大輔准教授が研究代表者を務める科学研究費基盤研究（B）「ロシア・旧ソ連文化におけるメロドラマ的想像力の総合的研究」及び安達准教授の組織による2021年度スラブ・ユーラシア研究センター公開講座「メロドラマするロシア：アジアとの比較から考える大衆文化の想像力」に基づき、2021年8月にオンライン開催された第10回ICCEES大会で「メロドラマ的想像力を再考する」と銘打った4パネルに参加した海外研究者との協力によって企画されたものです。組織委員会には安達准教授のほか、センター発行の国際査読学術誌 Acta Slavica Iaponica の諮問委員を務

めていただくなど、関係の深いイリノイ・ウェズリアン大学名誉教授マリーナ・バーリナさんに加わっていただきました。

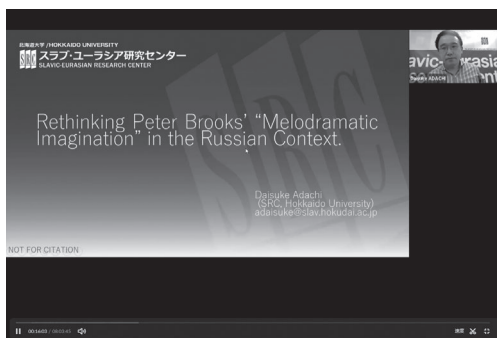
大衆文化研究にあたって欠かすことができない重要テーマでありながら、ロシアや英語圏でもそれほど研究が進んでいないロシア・ソ連のメロドラマ文化を新しい角度から理論的・体系的に読み直す試みは世界的に見ても類例のないもので、2019年度に外国人招へい教員としてセンターに滞在したエフゲーニ・ドブレンコさん（ヴェネツィア大学教授）をはじめ、日本国内及びアメリカ・イギリス・ロシア・イタリアの期待の若手から超大家まで、一流の専門家が幅広く集まりました。

シンポジウムでは近現代の様々なジャンルが取り上げられました。そのトピックはトルストイ、ドストエフスキー、チェルヌイシェフスキーといった19世紀の古典文学から、サイレント期からスターリン時代の映画、ソ連のポップソング・児童文学・社会主義リ

アリズム文学、最新のTVドラマやYoutubeまで多岐に渡り、ロシアの文脈においてメロドラマ研究が持つ意味や可能性についてアイロニー・道徳・身体・検閲・ジェンダーなど新鮮な視点から熱心に論じられました。

会場はセンター大会議室とZoomによるオンライン参加を併用して行い、二日間で約70名の参加がありました。その半数近くが海外約10か国からの参加者であったことは、このシンポジウムの国際的な注目度を裏付けるものです。現在の世界情勢の中でロシア文学・文化研究にも根本的な見直しが求められていますが、国際共同研究を継続し発展させるというセンターの強い意志と組織力を内外に示すことができました。今後は、それぞれの報告を基に英語による論文集の刊行が予定されています。

（スラブ・ユーラシア研究センター）



開会時の趣旨説明（Zoom画面）



閉会時の記念撮影

静内研究牧場の「北大短角牛」が新ひだか町の学校給食に採用

8月26日（金）、静内研究牧場で生産された北大ブランド牛「北大短角牛」が、牧場所在地である新ひだか町の全小中学校（小学校6校、中学校3校）の学校給食に採用されました。メニューはブルコギ丼で、約74kgの肉が使われました。

これは新ひだか町による地場産米の需要減少や畜肉の消費減少対策として行われた事業で、学校給食に提供する

ことで児童やその家族に地元食材への理解や消費拡大に繋げようとするものです。静内研究牧場では以前より、地域に根差す本学の施設として、地域での利活用や貢献を考えていた河合正人牧場長の考えと合致したことで実現しました。

当日取材対象となった山手小学校を視察した河合牧場長は、2年生の教室で牧場や短角牛の説明をしたところ、

こどもたちからは「美味しかった」「いつものお肉と違う」「毎日食べたい」など、嬉しい感想を聞くことが出来ました。

今後も地域に開かれた本学の施設として、様々な活動を行っていきたいと考えています。

（北方生物圏フィールド科学センター）



河合牧場長による解説を聞く児童たち



提供されたブルコギ丼給食

国際連携研究教育局先住民・文化的多様性研究グローバルステーションのジョー・ワトキンス教授が総長と懇談

8月22日（月）、国際連携研究教育局（GI-CoRE）のグローバルステーションの1つである「先住民・文化的多様性研究グローバルステーション（GSI）」に、ジョー・ワトキンス教授が本学正規教員として来日したことを受け、寶金清博総長、横田 篤理事、GSI長である加藤博文教授がワトキンス教授と懇談しました。

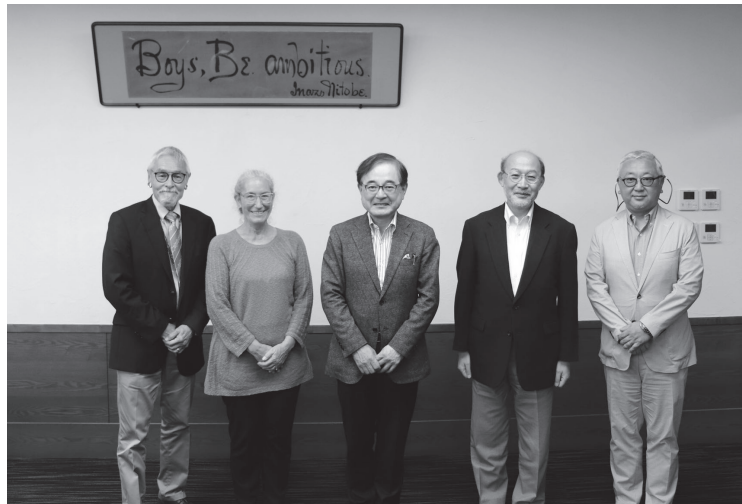
GSIは、令和3年度より活動を開始しており、アリゾナ大学人類学部客員教授であるワトキンス教授は同年8月より参画してきました。アメリカ先住民

のチョクトー族であるワトキンス教授は、オクラホマ大学でも教育研究を行っており、前アメリカ考古学会会長でもあります。また、オバマ政権下で政策提言に携わった経験もあり、懇談の席上では、ワトキンス教授より、本学滞在中に執筆予定のアイヌ民族に関する著書や、GSIが刊行するe-journalの総括編集者としての活動など滞在中の計画について説明がありました。また、北米・オセアニアでの先住民に対する差別解放政策の解説や、研究成果の社会的実装、大学と先住民の関係

に関しても幅広い意見交換が行われました。

GSIでは、アメリカ先住民研究を牽引してきた同教授を迎え、本学のダイバーシティ・インクルージョン宣言に資する活動をより一層進展させるために、大学院生向けの講義に加え、広く市民にも公開された講演を予定しています。

（国際連携研究教育局）



ジョー・ワトキンス教授（左から1番目）

■ 研修

令和4年度北海道地区国立大学法人等中堅技術職員研修

開催日：令和4年8月2日～4日

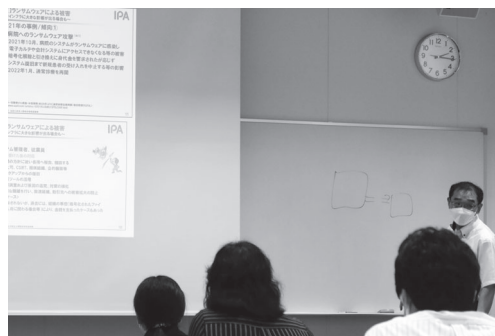
開催場所：工学部フロンティア応用科学研究棟

研修目的：北海道地区国立大学法人等の中堅技術職員として、現在の立場と責務を自覚させるとともに、職務遂行に必要な知識や社会的見識等を深め、国立大学法人等の技術系業務における中核となるべき職員として、その資質向上を図ることを目的とする。

主催部局：技術支援本部



開講式挨拶（永井謙芝 技術支援本部統括技術長）



講義「情報セキュリティ」
（飯田勝吉 情報基盤センター准教授）



講義「ハラスメント防止」
（柿崎真実子 ハラスメント相談室専門相談員）



講義・グループワーク（株式会社フォーブレン）

令和4年度北海道地区国立大学法人等中堅職員研修

開催日：令和4年8月31日～9月2日

開催場所：北海道大学学術交流会館第一会議室

研修目的：北海道地区国立大学法人等の中堅職員としての立場と責務を自覚させるとともに、職務に対する知識を深め、企画力及び問題解決能力の向上を図ることを目的とする。

主催部局：総務企画部人事課



開講式挨拶・特別講話（行松泰弘 理事）



講義・実習（特定非営利活動法人手と手）



講義・グループワーク（株式会社フォーブレン）

■表敬訪問

海外

年月日	来 訪 者	来 訪 目 的
4.8.3	JICA 小原 学 中南米部長	今後の交流に関する懇談
4.8.5	オックスフォード大学（英国） Sarah Rowland-Jones教授、Simon Davis教授	国際連携研究教育局バイオサーフィス 創業グローバルステーションでの共同 研究と教育に関する懇談
4.8.19	サッポロデンタルカレッジ（バングラデシュ人民共和国） Asad-Uz-Zaman 学長	今後の交流に関する懇談
4.8.26	駐日ルーマニア大使館 Ovidiu Dranga 特命全権大使	今後の交流に関する懇談



小原 学 JICA中南米部長（左から1人目）



オックスフォード大学（英国）Sarah Rowland-Jones教授（左から4番目）、
Simon Davis教授（左から3番目）



Asad-Uz-Zaman サッポロデンタルカレッジ学長（右から4人目）



Ovidiu Dranga 駐日ルーマニア特命全権大使（左から2人目）

（国際部国際連携課、国際企画課）

■ 人事

令和4年7月28日付発令

新 職 名（発令事項）	氏 名	旧 職 名（現職名）
【経営協議会委員】 （期間：令和6年7月27日まで）	岩 永 正 嗣	北海道経済産業局長

令和4年8月31日付発令

新 職 名（発令事項）	氏 名	旧 職 名（現職名）
【教授】 （任期满了） （辞職）	中 園 和 貴 佐 藤 陽 子	大学院公共政策学連携研究部附属公共政策学研究センター教授 大学院法学研究科教授

令和4年9月1日付発令

新 職 名（発令事項）	氏 名	旧 職 名（現職名）
【教授】 大学院水産科学研究院教授 大学院メディア・コミュニケーション研究院教授 大学院公共政策学連携研究部附属公共政策学研究センター教授	栗 原 秀 幸 田 中 英 資 田 中 謙 一	大学院水産科学研究院准教授 （採用） 厚生労働省年金局課長

新任教授紹介

令和4年9月1日付



水産科学研究院教授に

くりはら ひでゆき
栗原 秀幸 氏

海洋応用生命科学部門
水産食品科学分野

生年月日

昭和40年5月20日

最終学歴

北海道大学大学院農学研究科修士課程修了（平成2年3月）
博士（水産学）（北海道大学）

専門分野

食品化学、海洋天然物化学



メディア・コミュニケーション
研究院教授に

た なか えいすけ
田中 英資 氏

メディア・コミュニケーション部門
国際地域文化論分野

生年月日

昭和50年6月10日

最終学歴

ケンブリッジ大学 考古学・人類学部 博士課程修了（平成20年5月）
PhD（社会人類学）（ケンブリッジ大学）

専門分野

社会人類学、文化遺産研究



公共政策学連携研究部教授に

た なか けんいち
田中 謙一 氏

附属公共政策学研究センター

生年月日

昭和45年5月7日

最終学歴

東京大学法学部卒業（平成6年3月）

専門分野

社会保障

訃報

名誉教授 まつなが 松永 よしお 義夫 氏
(享年93歳)



名誉教授 松永義夫 先生が令和4年4月2日にご逝去されました。

松永先生は昭和4年岐阜県に生まれ、同27年東京大学理学部化学科を卒業、同32年同大学院を修了後、同32-34年にBritish Columbia大学（カナダ）、次いでAmerican Cyanamid社（スイス/アメリカ）で在外研究、同40年北海道大学理学部固体化学講座講師に着任、同41年同助教教授就任後教授に昇進して

おります。同大学の26年間に148名の学部学生・大学院生の指導・教育に当たられました。平成4年同大学を定年退職後、熊本大学教授（平成4-5年）、神奈川大学教授（平成5-11年）を務められました。また、北海道大学評議員、同触媒化学研究センター長を併任し、大学の運営及び研究センターの研究活動促進、将来構想の検討に貢献されております。学外においては、学術審議会専門委員、日本学術会議化学研究連絡委員会委員、岡崎国立共同研究機構分子科学研究所運営協議員・評議員等の要職を務め、化学分野(主に分子科学)の発展に多大な貢献をされております。学会においては日本化学会北海道支部長・理事として運営に携わり、また、化学会速報誌のスタイルガイドを著し、化学会の発展に尽力されております。

先生は、一貫して機能性有機物質の設計・開発・物性研究に取り組みまし

た。特に、修士時代における高導電性ペリレン・臭素の発見は、世界的な高導電性有機材料開発の出発点であり（ノーベル化学賞：白川先生らによる高伝導性ポリマーの開発の先駆）、これは、先生の際立った物質勘（高導電性物質は赤外領域にプラズマ端を持つゆえ深黒色）を端的に示すものです。長年にわたり、分子の形状と電子状態制御→分子配列制御・集合体電子状態の設計→機能性有機固体（高導電性・液晶性・相転移等を示す電荷移動型分子化合物）の開発を行い、これらの独創的研究及び新分野の創出に対し、平成元年「機能性分子錯体の物理化学」で第41回日本化学会賞を受賞されております。

ここに謹んで松永先生の学術研究の進展、人材育成の貢献に感謝し、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

（理学院・理学研究院・理学部）

名誉教授 つつみ 堤 あきひろ 耀廣 氏
(享年82歳)



名誉教授 堤 耀廣 先生は令和4年8月4日にご逝去されました。

堤先生は昭和15年7月1日に青森県に生まれ札幌で育ち、昭和38年3月に北海道大学理学部高分子学科を第一期生として卒業、理学研究科高分子学専攻修士課程を修了、博士課程を単位修得退学し、教務職員・助手・講師を経て、昭和54年4月理学部助教教授に就任

されました。この間の昭和52年1月より2年間フランス・サクレ原子力研究所に滞在し、高分子の多重内部回転による核磁気共鳴（NMR）緩和理論と実験の研究を行い、異なるNMR周波数による測定の有用性をいち早く提唱しました。昭和58年4月に同大工学部応用物理学科助教教授に転任し、昭和61年4月に同教授に就任されました。平成16年3月に定年退職し、同年4月に北海道大学名誉教授の称号を授与されました。この間専攻内に大型実験装置3台を導入し研究の発展をはかりました。

堤先生は棒状の形態をとる高分子主鎖と無定形の側鎖からなる不均一な生体高分子系を対象として、時間領域が異なる様々な緩和実験から系の詳細な動的構造を明らかにしました。特に著しく発展しているNMRとともに研究を進め、 ^1H ・ ^{13}C 核に加えて重水素核

や電子スピンも測定対象に加え分子運動と物性の研究を推進しました。

学内では、長年にわたり工学部NMR室の管理運営に携わり、高磁場NMRやMRIを全学利用に供しました。学外では、高分子学会・日本生物物理学会・日本NMR学会の各種委員等を歴任し、とくに日本NMR学会設立時には発足世話人として尽力されました。

また、堤先生は学生時代に北大交響楽団に所属してオーボエを担当し、卒業後も顧問・相談役・名誉団長を歴任し、さらに北海道交響楽団に参画し理事長・団長として同団の発展を見守りました。

堤先生の長年にわたるご功績に敬意を表し、ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

（工学院・工学研究院・工学部）

名誉教授 小山 光一 氏
(享年67歳)



名誉教授 小山光一 先生が、令和4年7月23日にご逝去されました。ここに小山先生の功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

小山先生は、昭和29年12月13日に埼玉県に生まれ、浦和高校、慶応義塾大学、一橋大学大学院を経て、平成元年、米ミネソタ大学で経済学のPh. Dを取得されました。その翌年に本学の経済学部にて助教授として着任され、平成11年教授に昇任、令和2年3月に定年退職されるまで、財政学の分野で研究活動と教育活動に従事されました。

小山先生は、ミネソタ大学在学中、のちにノーベル経済学賞を受賞するL. Hurwiczに師事し、「インセンティブ整合的な制度設計」の理論を学ばれました。これは、インセンティブ(=私的動機)にもとづいて自由に行動する

人間や企業が、制度にどう反応するかまで読み込んで制度を設計しようという考え方です。意図せざるインセンティブを与えうる制度の分かりやすい例として、先生が生前の講義で挙げられていたのは、「長期入院を促す医療制度」「親の介護施設への入居を促す生活保護制度」「企業による雇用の非正規化を促す年金制度」などです。小山先生はインセンティブ整合的な制度のみが存続可能だと考えられ、北大在任中一貫して、日本の諸制度がはたしてインセンティブ整合性を満たしているか、満たしていない場合はどのように改良すれば良いのかを論じる研究を継続されました。公的年金制度の分野では、「年金の収益率」という観点から国庫負担が果たす役割と限界を示されました。また、法人税の分野では、高い法人税率が国内投資の低下をもたらす構造を指摘されました。さらに、地方財政の分野では、地方公共団体の財源不足を地方交付税で保障する仕組みが、地方分権の発展を妨げていることを示されました。一連の研究成果はシリーズとして紀要(北大経済学研究院)に発表され、北海道大学学術成果コレクション(HUSCAP)においてオンライン上で閲覧することが出来ます。小山先生が存命であれば、一連の研究は一冊の著書としてまとめられ、

日本の税制度や社会保障制度を語るうえで欠かせない教科書となっていたことでしょう。先生の早過ぎる旅立ちが悔やまれてなりません。

小山先生がこのようなテーマに関心を持たれたのは、長年にわたり本学で財政学の講義を担当される中、日本の諸制度に対する問題意識が生起されていったからではないかと拝察されます。先生の講義は分かりやすく、教室はいつも学生であふれていました。大学院の財政学講義も多数の履修者を集め、学部のゼミも人気ゼミでした。このほか、札幌国税局の土地評価審議会委員にも長く携われ、その関わりから毎年北大での国税局長の講演会をコーディネートされていました。また、HBCラジオの情報番組でも長くコメンテーターを務められました。日本の諸制度に対する小山先生のアプローチは、先生のこうした教育活動・広報活動を通じて広く共有されたように思われます。

このように、小山先生は長年にわたって、日本の制度分析、学術教育の発展と推進、優れた人材の育成に多大な貢献をされました。ここに謹んで心よりご冥福をお祈り申し上げます。

(経済学院・経済学研究院・経済学部)

名誉教授 宮台 朝直 氏
(享年92歳)



名誉教授 宮台朝直 先生が、令和4年8月20日にご逝去されました。

宮台先生は昭和5年1月14日神奈川県(横浜市)に生まれ、昭和28年3月東京教育大学理学部物理学科を卒業、同年4月、日本電信電話公社電気通信研究所に入所されました。同研究所在籍中の昭和37年に東京教育大学より学位を授与され、同年8月北海道大学理学部講師に着任されました。翌38年4月には同助教授、同56年4月に同教授に

昇任され、平成5年3月に定年退官、同年4月に北海道大学名誉教授の称号を授与されました。この間、教養課程物理学とともに大学院理学研究科を担当され、教養課程、理学部、理学研究科に属する学生の教育と研究指導に尽力されました。

研究面では、一貫して磁性分野の実験的研究に従事されました。本学着任当初は磁性絶縁体の研究に取り組み、当時磁性材料として主流であった銅鉄酸化物(銅フェライト)の単結晶育成に成功し、物理定数表にも掲載される強磁性共鳴のデータを公表されました。その後、磁性研究の流れが遍歴電子系の問題に移ると、パイライト型の二硫化ニッケルを中心とした化合物の研究に着手され、高圧下や元素置換により誘起される金属-絶縁体転移が、構造変化を伴わず電子相関に起因する相転移(モット転移)であることを突きとめられました。この遍歴-局在間の電子状態の変化と磁気的性質の関係

性を調べた一連の研究は高い評価を受け、多くのデータがノーベル物理学賞を受賞したネヴィル・モット教授の80歳記念図書に採録されています。ご定年間際まで研究の手を緩めず、平成に入ってから新たな研究潮流であった重い電子系の物質探索に取り組み、ウラン化合物で重い電子の振る舞いを示す物質を発見されています。

学内では学生部委員会委員、学生相談室運営委員・相談員、教養部学生委員などを務め、学生の厚生補導・学習指導に尽力されました。学外では大学入試センター委員、フェライト国際会議組織委員、応用磁気国際会議組織委員、応用磁気学会評議委員などを務められました。

宮台先生の長年にわたるご功績に敬意を表し、多大なご貢献に感謝申し上げます。謹んでご冥福をお祈りいたします。

(理学院・理学研究院・理学部)

編集メモ

- 9月5日（月）、緑に溢れていたキャンパスが、徐々にその色を変え始めました。道すがら、スマートフォンを片手

に写真を撮る方も増えているようです。お互いに譲り合いながら、事故のないよう過ごしていきたいですね。



秋の深まる札幌キャンパスの様子

●リテラポブリ最新号が発行

広報誌「リテラポブリ」。9月に最新号Vol.69を発行しました。今回の特集は、「受け継ぐ」をテーマに「ロバスト農林水産工学国際連携研究教育拠点」、「北方生物圏フィールド科学センター厚岸臨海実験所」、「北海道ワイン教育研究センター」を取り上げました。デジタル版も掲載していますので、ぜひご覧ください。

<https://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/litterae.html>



裏表紙メモ

今月のキャンパス風景は花木園です。ここは花き・造園学の教育実習のための植物園で、道内で見られる様々な植物が自然に近い状態で植えられています。そんな花木園、風の強い日は周囲に警戒が必要です。あなた目がけて、どんぐりが落ちてくるかもしれません。今日もどこかで地面を鳴らす、こつんこつんという音に秋の訪れを感じます。

キャンパス風景 30 花木園（北11条西10丁目）



北大時報 ⑨ No.822 令和4年9月発行

北海道大学社会共創部広報課 〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

TEL : (011) 706-2610 / FAX : (011) 706-2092 / E-mail : kouhou@jimu.hokudai.ac.jp

<https://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/jihou.html>